

図 2. 石皿の石材利用傾向

1：鶴ヶ島中学西遺跡（齊藤・早川，1997），稻荷上遺跡（石塚・安井，2017），北権現遺跡（清水，2007），景台遺跡（加藤，1997） 2：諏訪北1／諏訪北2／諏訪南／二ツ家下遺跡（大谷，2014）；三五郎山遺跡（齊藤・坂田，2016），デーノタメ遺跡（磯野ほか，2019） 3：下加遺跡（田代ほか，1990；山形ほか，1992），南中丸下高井遺跡（立木ほか，1988；橋本ほか，2020），大木戸遺跡（西井・鈴木，2008），指扇下戸遺跡（山口ほか，1992） 4：西原大塚遺跡（尾形・深井，2007；佐々木ほか，2009；徳留ほか，2013；尾形ほか，2024），吹上原遺跡（鈴木ほか，2015） 5：八王子遺跡（柳戸・村上，2001），落合上ノ台遺跡（富本ほか，2001），加能里遺跡（中島・新藤，2003；熊澤・油布，2015），横道下遺跡（富本，2019） 6：海谷遺跡（中島・新藤，2003a,b），東原遺跡（古谷，2017a），西内手遺跡（古谷，2018） 7：恋ヶ窪遺跡（国分寺市遺跡調団，1988,2008），恋ヶ窪東遺跡（林ほか，2017），日影山遺跡（早川泉ほか，1999） 8：下宅部遺跡（戸沢ほか，2006） 9：下野谷遺跡（市毛ほか，1998,2000；石井・大野，1999；工藤ほか，2003） 10：殿竹遺跡（岩橋，2010），下野毛遺跡（品川・森本，2014；山崎ほか，2019；堀ほか，2024），桜木遺跡（寺田ほか，2014），田直遺跡（岩橋ほか，2017），上神明遺跡（寺田ほか，2018） 11：多摩ニュータウン遺跡（佐藤・山口，1999） 12：中原遺跡（阿部・飯塚，2005），杉久保遺跡（押方・和田山，2022）（ ）：調査個数

石皿と石材

1) 石皿の石材利用率

埼玉県中央部から東京都と神奈川県の一部について、石皿の石材利用傾向を図2に示した。閃緑岩、安山岩および結晶片岩の合計の占める割合が63～93%と高い。とくに閃緑岩では埼玉県南部から東京都にかけて42～56%を占める。結晶片岩では埼玉県中央部から東京都北部にかけて15～28%を占めるが、さらに南側では減少し、多摩川の南では1%以下である。なお、結晶片岩では緑泥石片岩の占める割合が下宅部遺跡（図2-8）で85%と高く、泥質や砂質片岩の割合は低い（戸沢ほ

か，2006）。

2) 石皿の形状

石皿は木の実などを磨り潰すために、磨石とともに使用したと考えられている。外形は楕円形～長方形で、中央部が浅くへこみ、磨痕や擦痕が認められる（林ほか，2017；石塚・安井，2017）。遺跡から出土する石皿は欠損していることが多い。

閃緑岩製と安山岩製の石皿の形状は、楕円形のものが多く、中央部のへこみは閃緑岩製石皿ではわずかであるが（図3 a, b）、安山岩製石皿では深い（図3 c, d）。安山岩は多

孔質であるものが多い（松岡，2025a）。結晶片岩製石皿の外形は、角が丸い長方形や角ばったものがある（図3 e-h）。所沢市東原遺跡の緑泥石片岩製石皿は、側縁が弧状に調整

されている（古谷，2017a）。また、中央部のへこみは深く、皿底面が抜けているものがある（図3 f, h）。

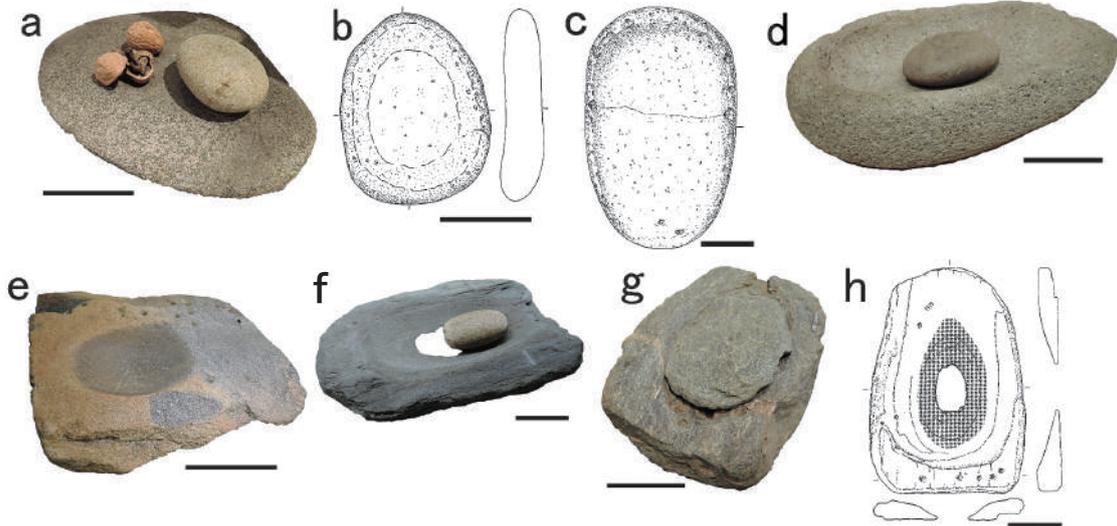


図3. 石皿と磨石の石材

a : 閃緑岩製石皿と砂岩製磨石（狭山市 西久保遺跡） b : 閃緑岩製石皿（飯能市 加能里遺跡：宮内ほか，2016） c : 安山岩製石皿（さいたま市 下加遺跡：山形ほか，1992） d : 安山岩製石皿と閃緑岩製磨石（東大和市，遺跡名不明） e : 石墨片岩製石皿（飯能市 落合上ノ台遺跡） f : 緑泥石片岩製石皿と閃緑岩製磨石（三芳町 俣野遺跡） g : 石墨片岩製の石皿と磨石（美里町 北貝戸遺跡） h : 緑泥石片岩製石皿（あきる野市 前原・大上・北伊奈遺跡：渋谷・黒尾，2010） スケールバーは10 cm。

3) 石皿の平面形による区分

大工原（2008）などにより、石皿の形態分類や変遷などが明らかにされている。本報告では、平面形と石材との関係を調べるため、三村ほか（2019）の区分を引用するとともに、区分を一部追加した（図4）。

閃緑岩製と安山岩製の石皿では、平面形が丸みを帯び、円形、楕円形および隅丸多角形に区分される（図5 a-f）。一方、結晶片岩製石皿では角が丸く、辺は直線的または緩やかな弧状をしており、隅丸長方形および隅丸多角形の平面形のほかに（図3 h，図6 a-d）、不規則な平面形または角が角ばっている特徴を示すものがあり、隅角方形、隅角長方形および隅角多角形に区分される（図6 e-i）。

閃緑岩製石皿の平面形は円形～楕円形が73%、隅丸多角形が22%を占める（図7）。安山岩製石皿は、楕円形が75%、隅丸多角形が14%を占め、両者ともに隅角方形および隅角多角形はみられない。

一方、結晶片岩製石皿の平面形は隅丸長方

形および隅丸多角形が64%を占め、隅角方形および隅角多角形は33%を占める。円形はなく、楕円形～隅丸方形がわずかにみられた。

三村ほか（2019）		本報告で追加した平面形	
丸形			
楕円形			
隅丸方形		隅角方形	
隅丸長方形		隅角長方形	
隅丸多角形		隅角多角形	

図4. 石皿の平面形の区分

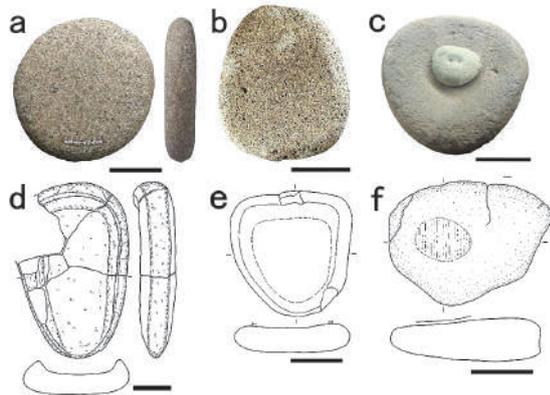


図5. 閃緑岩製と安山岩製の石皿の平面形

a: 円形の閃緑岩 (国分寺市 恋ヶ窪東遺跡: 林ほか, 2017) b: 楕円形の閃緑岩 (日高市 宿東遺跡: 松本, 2020) c: 円形の安山岩 (鳩山町 虫草山遺跡)
 d: 楕円形の安山岩 (恋ヶ窪東遺跡: 国分寺市遺跡調査団, 2003) e: 隅丸多角形の閃緑岩 (国立市 谷方東方遺跡: 馬場ほか, 2010) f: 隅丸多角形の安山岩 (多摩ニュータウン遺跡: 田中ほか, 1997)
 スケールバーは10 cm。

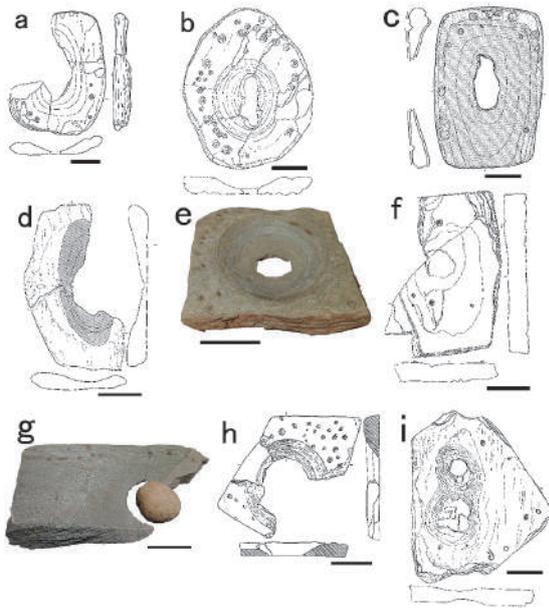


図6. 緑泥石片岩製石皿の平面形

a: 楕円形 (所沢市 山下後遺跡: 古谷, 2017a) b: 楕円形 (日高市 新田東遺跡: 上野・細田, 2012)
 c: 隅丸長方形 (西東京市 下野谷遺跡: 石井・大野, 1999) d: 隅丸多角形 (世田谷区 殿竹遺跡: 岩橋, 2010) e: 隅角方形 (飯能市 八王子遺跡)
 f: 隅角長方形 (飯能市 横道下遺跡: 富本, 2019) g: 隅角長方形 (羽村市 山根坂上遺跡)
 h: 隅角多角形 (小川町 番場遺跡: 保田・吉田, 1997) i: 隅角多角形 (飯能市 落合上ノ台遺跡: 富本ほか, 2001)
 スケールバーは10 cm。

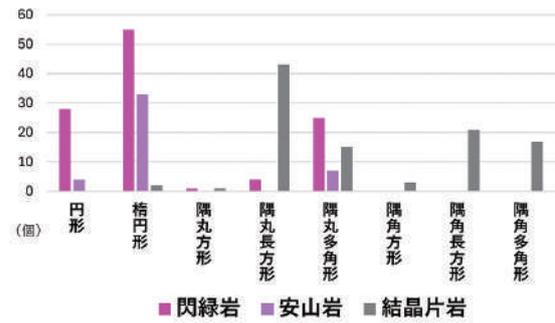


図7. 閃緑岩製、安山岩製および緑泥石片岩製の石皿と平面形

縦軸の数値: 今回調査した石皿の個数

閃緑岩製石皿の平面形は円形～楕円形が73%、隅丸多角形が22%を占める (図7)。安山岩製石皿は、楕円形が75%、隅丸多角形が14%を占め、両者ともに隅角方形および隅角多角形はみられない。

一方、結晶片岩製石皿の平面形は隅丸長方形および隅丸多角形が64%を占め、隅角方形および隅角多角形は33%を占める。円形はなく、楕円形～隅丸方形がわずかにみられた。

4) 結晶片岩製の成形石皿と不成形石皿

下宅部遺跡 (図2-8) の結晶片岩製石皿では、加工を施している成形石皿と自然礫をそのまま使用している不成形石皿に二分されている (戸沢ほか, 2006)。本報告では、不成形石皿は転石とその分割、切出の石をそのまま使用している場合も含めた。

石皿の平面形は隅丸長方形または隅丸多角形を呈し、左右対称形で、側面が丸みを帯びている (図3 h, 図6 a-d, 図8 a)。所沢市の西上遺跡の石皿は割れた礫を使用し、側縁を加工している (新藤, 2007)。西原大塚遺跡の石皿では、側縁に調整剥離が施されており (図8 b; 徳留ほか, 2013)、山下後遺跡の石皿でも楕円形に調整加工され (図6 a; 古谷, 2017b)、東原遺跡の石皿でも側縁が弧状に調整されている (古谷, 2017a)。これらの石皿のほかに、図3 bの右側や図6 cの下側に掃き出し部分が存在する石皿も、成形石皿に含まれる。

次に不成形石皿について述べる。嵐山町の行免司遺跡の石皿の平面形は、ややいびつな楕円形で、左右対称になっていない。 (図8 c)。美里町の広木上遺跡の石皿は、三角形

あり、土井(1986)は、流紋岩質凝灰岩の石材が相模川流域の川原石であると推察している。

一方、北本市とさいたま市の遺跡で、安山岩製石皿の石材利用傾向が41～45%程と高いことについては、縄文時代には奥東京湾が存在することから、安山岩の石材は北方の利根川方面から運ばれてきた可能性があるが、今後の検討課題である。

3) 結晶片岩の石材と採取地

結晶片岩製石皿の石材利用傾向で、埼玉県内は21～43%と高率を示す(松岡, 2025a)。東京都北部では17～20%と埼玉県内よりやや低率を示し、南部では7%とさらに低率となり、多摩川の南では1%以下となる。

所沢市の西上遺跡の石皿は割れた礫を使用しているとの報告があり、嵐山町の行免司遺跡の石皿(図8c)では、ややいびつな楕円形の平面形をしており、自然礫をそのまま利用した可能性がある。美里町の北貝戸遺跡の石皿(図3g)は、ゴツゴツした外形をし、飯能市の落合上ノ台遺跡の石皿(図3e)と小川町の番場遺跡の石皿(図8e)は、不規則な外形で、外縁が尖っている。また、美里町の広木遺跡の石皿(図8d)は、三角形の平面形であるが、ややゆがんでおり、裏面には自然面が残る。これらのことから、石皿の石材は結晶片岩の転石または転石を分割したものを利用したと考えられる。

また、石皿の形状が板状で、平面形が隅角方形から隅角多角形などを呈し、角が角ばり、側縁も凸凹しており、さらに、側面も凸凹がみられる(図6)。これらは不成形石皿に相当し、転石の分割または露頭から切り出した板状の石材をそのまま使用していると考えられる。

川越市の牛原遺跡の敷石には点紋緑泥石片岩と紅れん石片岩があることから、石材の原産地は荒川沿いの長瀨町から皆野町および川越市に比較的近い都幾川の上流の槻川の小川町から嵐山町付近が考えられる(図13)。牛原遺跡の敷石には、大きさ50～7cmの結晶片岩が14枚も利用されており、最大の絹雲母片岩では長さ138cm、幅85cm、厚さ5.5cmで重さ102kgである(図11, 図12; 表3; 黒坂, 2008)。黒坂(2008)によると、この敷石の



図11. 牛原遺跡(A)と大木戸遺跡(B)の位置



図12. 牛原遺跡の敷石
a～e: 表4に対応。黒坂(2008)を引用し、加筆。

表4. 牛原遺跡と大木戸遺跡の敷石の長さ、幅、厚さ(cm)と重さ(kg)

遺跡名	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	
A 牛原	a	138	85	5.5	102.4	絹雲母片岩	切出
	b	66.5	74	6.0	65	絹雲母片岩	切出
	c	45	70.5	3.0	20.7	点紋緑泥石片岩	切出
	d	58	72.5	3.5	19.6	点紋緑泥石片岩	切出、分割痕
	e	32.5	23	5.5	6.0	紅れん石片岩	転石
B 大木戸	142	75	未	71.7	紅れん石片岩		

切出: 原産地で切り出し。転石: 原産地近くの河川で採取。黒坂(2008)と西井, 鈴木(2008)より作成。



図13. 荒川および槻川沿いに見られる緑泥石片岩と紅れん石片岩の露頭
位置は牧本・竹内(1992)より作成。

総重量564.2 kgの石材を運ぶには、原産地が小川町から嵐山町付近であった可能性が高いと推定され、これらの石材は原産地で切り出されたものの、原産地近くの河川で採取された転石であるとされた。さらに、緑泥石片岩の敷石には、分割痕が報告され（図12d、図14）、他の敷石などに対になる矢穴が見つからないことから、石材が産地から出荷されたと推定している。そして、小川町から嵐山町の槻川沿いに露出した結晶片岩が切り出され、筏により都幾川を經由して運ばれたと推定された。

なお、小川町下里の槻川の河床に露出する緑泥石片岩には、矢穴列痕がみられる（図13；松岡，2025a）。この矢穴列痕のつくられた時期は不明であるが、槻川沿いに露出した結晶片岩の切り出しに関連する可能性がある。

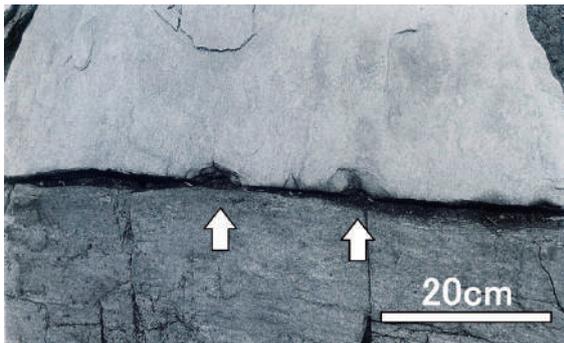


図14. 牛原遺跡の緑泥石片岩の敷石（図12d）にみられる分割痕
黒坂（2008）に加筆。

4) 結晶片岩の石材の広がり と加工

石皿の石材利用傾向において、結晶片岩は埼玉県および東京都北部から南側では減少し、多摩川の南では1%以下となる（図2、図10）。

一方、安山岩は逆に増加する。埼玉県の南部に位置する志木市や和光市の遺跡において、結晶片岩製と安山岩製の石皿が同時期に使用されている（表3）。これらの遺跡には、結晶片岩は小川町方面から、安山岩は相模川方面から運びこまれて、利用されていたことが推察される。

牛原遺跡の東方のさいたま市の大木戸遺跡には重さ71.7 kgの紅れん石片岩の敷石がみられる（図15；西井・鈴木，2008）。黒坂（2008）によると、牛原遺跡と大木戸遺跡は、

ともに縄文時代中期～後期初頭の遺跡であり、荒川もしくは奥東京湾の対岸に位置することから、槻川産の結晶片岩の供給が普遍的なシステムとして存在したことを示唆しているとした。

また、栗島（2012）は縄文時代後晩期の石棒製品の生産と広域流通において、緑泥石片岩製石棒の石材の採石地と供給を検討した。それによると、寄居町付近の荒川沿いの緑泥石片岩礫が採取され、陸路で深谷市の原ヶ谷遺跡まで運ばれ、石棒の形態作出がなされた。さらに、この石棒が利根川や荒川を通して、さいたま市方面へ運ばれたと推定している。



図15. 大木戸遺跡の紅れん石片岩
大木戸遺跡の位置については図11を参照。西井・鈴木（2008）より引用。

遺跡から出土する点紋緑泥石片岩製石皿の分布は、小川町の南に位置する毛呂山町白綾遺跡（図16）などを含む埼玉県内の6遺跡と東京都の2遺跡へと広がる（資料3）。黒坂（2008）および栗島（2012）によれば、点紋緑泥石片岩製石皿の石材は、小川町～嵐山町付近の河川沿いに分布する点紋緑泥石片岩の転石または露頭から切り出され、河川や陸路により運搬されたと考えられる。



図16. 毛呂山町白綾遺跡の点紋緑泥石片岩製石皿（左）と石皿の接写（右）
接写では、1～2 mmの長石の点紋が確認できる。スケールバーは10 cm。

落合上ノ台遺跡から報告された緑泥石片岩製石皿は、板状を呈し、長さ52.0 cm、幅42.8 cm、厚さ6.0 cm、重さ16.0 kgと比較的大きいものである(図6 i; 資料3-⑬; 富本ほか, 2001)。飯能市などの遺跡から出土した板状の不成形石皿(図6 e-i)の緑泥石片岩からなる石材は、原産地で切り出され、不成形のままで使用したものと考えられる。

一方、同じ緑泥石片岩製石皿でも、割れた礫の側縁を楕円形に調整加工したり、側縁を弧状に調整したりするなど石材を成形した報告がある。下野谷遺跡の石皿(図6 c)と海谷遺跡の石皿(図8 a)は、平面形が隅丸長方形を呈し、左右対称形で側面が丸みを帯びている。このような石皿は、原産地での転石の分割、または露頭から切り出した石材が運ばれて遺跡周辺にて成形されたと考えられる。早稲田大学地理埋蔵文化財整理室(2000)によると、下野谷遺跡から出土する剥片の石材において、結晶片岩が砂岩およびホルンフェルスとほぼ同率を占めることから、遺跡周辺にて成形された可能性が高い。

遺跡から出土する石皿は欠損していることが多いため、比較することが難しいものの、下宅部遺跡の石皿は成形石皿が多いのに対して、小川町と飯能市の遺跡では不成形石皿が多いことは、その地域の文化の違いによるものかもしれないが、今後の検討課題である。

おわりに

昨年、埼玉県内の縄文時代の石器である石斧、石皿、磨石および凹石の石材利用傾向について報告した。今回は東京都と神奈川県まで範囲を広げて、石器の中の石皿に着目し、様々な視点から比較検討を試みた。

山本(1989)によると、石皿に利用される石材は、安山岩、砂岩および閃緑岩が多い。これらの石材は、転石や母岩から大きなものが得やすい、加工しやすい、耐久性があることで最適であった。一方、結晶片岩の石材利用傾向では、東日本の32地点の遺跡中4地点で認められた1~10%と低いが、埼玉県は15~28%と高いことが明らかとなった。このことは、長瀨町から皆野町と小川町から嵐山町付近に結晶片岩が分布し、結晶片岩の形状が板状になりやすく石皿の石材として利用しやすかったことに直結していると思われる。

なお、本報告および遺跡から出土した閃緑岩、安山岩および結晶片岩の石皿について、それぞれの大きさ(長さ、幅、厚さ)を(資料1~3)に示したので参照されたい。また、松岡(2024)では、埼玉県内の縄文時代の石斧の石材利用傾向を示したが、(資料4)ではさらに、さいたま市、東京都および神奈川県の資料を加えて示した。何かの参考になれば幸いである。

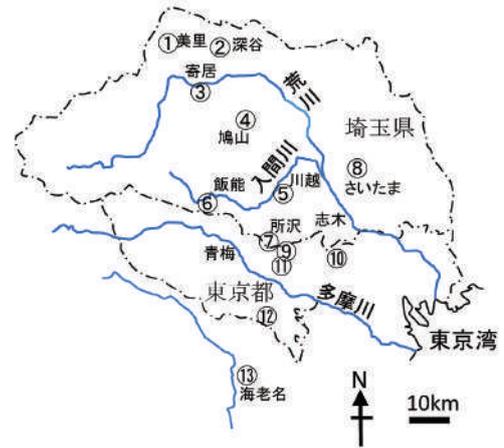
	市町村	遺跡名	長さ	幅	厚さ	石材	本報告
①	美里町	広木上	18.2	16.8	4.9	閃緑岩	
②	寄居町	むじな塚	32.7	28.1	8.7	閃緑岩	
③	日高市	宿東	25.6	21.5	4.3	石英閃緑岩	図5b
④	狭山市	稲荷上	35.8	34.4	10.3	閃緑岩	
⑤	狭山市	西久保	(31)	(27)	(7)	閃緑岩	図3a
⑥	飯能市	加能里	21.8	17.1	5.1	閃緑岩	図3b
⑦	志木市	西原大塚	24.3	25	6.3	閃緑岩	
⑧	所沢市	海谷	27.7	19.5	5.7	閃緑岩	
⑨	羽村市	羽ヶ田上	64.4	37.9	13.1	閃緑岩	
⑩	国立市	谷保東	25.1	24.7	8.3	閃緑岩	図5c
⑪	西東京市	下野谷	24.5	23.5	17.1	細粒閃緑岩	
⑫	国分寺市	恋ヶ窪東	14.5	13.4	2.9	閃緑岩	図5a
⑬	多摩市	ニュータウン	43	34.7	4.8	閃緑岩	



資料1. 埼玉県～東京都の縄文遺跡から産出した閃緑岩製石皿の大きさ

①上野 (1997) ②松本 (2009) ③松本 (2020) ④石塚・安井 (2017) ⑤報告書無し ⑥宮内ほか (2016) ⑦徳留ほか (2013) ⑧中島・新藤 (2003) ⑨新堀ほか (2018) ⑩馬橋ほか (2010) ⑪石井・大野 (1999) ⑫林ほか (2017) ⑬田中ほか (1997) 数値: cm ():実測値

	市町村	遺跡名	長さ	幅	厚さ	石材	本報告
①	美里町	広木上	18.9	15.8	4.7	安山岩	
②	深谷市	小台	26.8	24.5	5.8	安山岩	
③	寄居町	金嶽	33	21	9.8	安山岩	
④	鳩山町	虫草山	26.9	25.6	7.4	安山岩	図5c
⑤	狭山市	稲荷上	27.8	25.5	7.7	安山岩	
⑥	飯能市	横道下	28.8	24.7	7.7	安山岩	
⑦	所沢市	海谷	40.8	22	8.8	溶岩	
⑧	さいたま市	下加	48.6	30.6	9.4	安山岩	図3c
⑨	東大和	不明	43	26	5.5	安山岩	図3d
⑩	西東京市	下野谷	15	16.5	8.9	安山岩	
⑪	国分寺市	恋ヶ窪	27.4	10.3	7.0	安山岩	図5d
⑫	多摩市	ニュータウン	41.8	29.4	12.5	安山岩	図5f
⑬	海老名市	中原	31.4	23.6	14.4	安山岩	



資料2. 埼玉県～神奈川県の縄文遺跡から産出した安山岩製石皿の大きさ

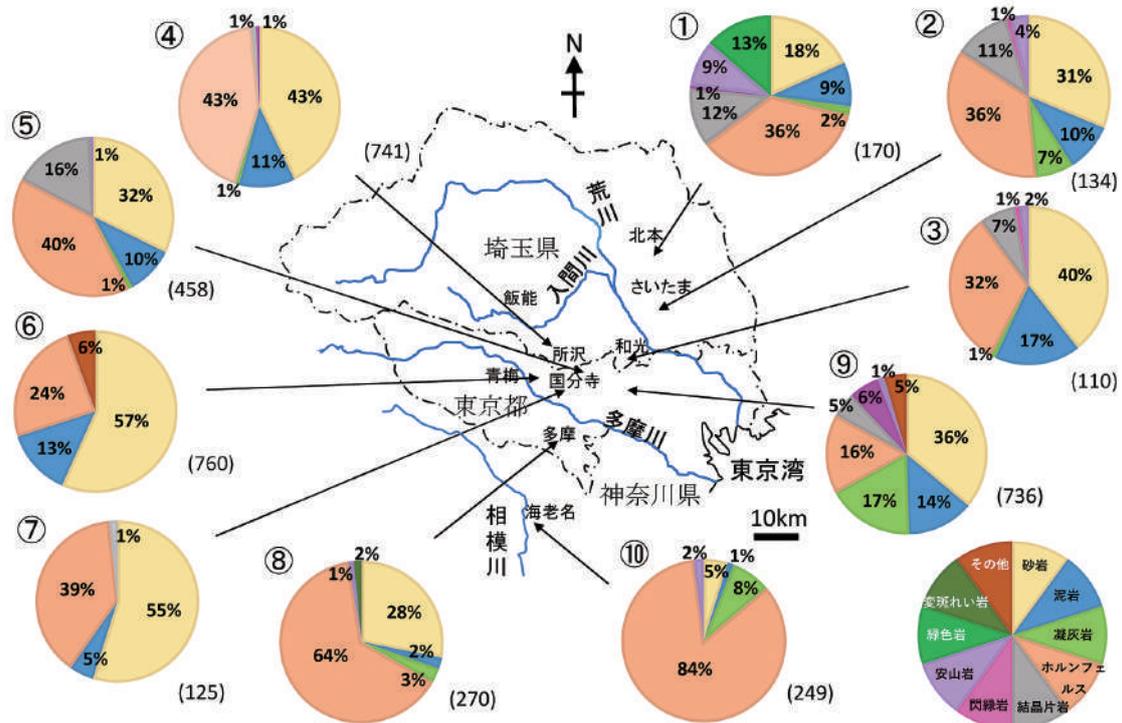
①上野 (1997) ②沢出・古池 (1990) ③小林 (2006) ④渡辺 (1988) ⑤石塚・安井 (2017) ⑥富本 (2019) ⑦中島・新藤 (2003) ⑧山形ほか (1992) ⑨東大和市 HP ⑩石井・大野 (1999) ⑪上敷 (2008) ⑫佐藤・山口 (1999) ⑬阿部・飯塚 (2005) 数値: cm ():実測値

	市町村	遺跡名	長さ	幅	厚さ	石材	本報告
①	美里町	広木上	24	14.3	7.8	点紋緑泥石片岩	図8d
②	美里町	北貝戸	31.9	20.6	5.9	点紋雲母片岩	図3g
③	小川町	番場	30.7	26.7	4	点紋緑泥石片岩	図6h
③	小川町	番場	48	27.5	5.7	点紋緑泥石片岩	図8c
④	嵐山町	行免司	36.3	17.6	3.6	緑泥石片岩	図8c
⑤	毛呂山町	新田東	47.6	38	5.6	緑泥石片岩	図6b
⑥	三芳町	俣野	(45)	(30)	(4)	点紋緑泥石片岩	図3f
⑦	志木市	西原大塚	55	41.3	7.5	点紋緑泥石片岩	図8b
⑧	飯能市	八王子	38.8	35.6	17.4	点紋緑泥石片岩	図6e
⑨	飯能市	横道下	38.4	27	5.5	緑泥石片岩	図6f
⑩	飯能市	落合上ノ台	41	33.7	5.8	点紋雲母片岩	図3c
⑩	飯能市	落合上ノ台	52	42.8	6.0	緑泥石片岩	図6i
⑪	所沢市	海谷	44.3	33.6	6.5	緑泥石片岩	図6a
⑪	所沢市	海谷	42.7	28.7	5.6	点紋緑泥石片岩	図8a
⑫	羽村市	山根坂上	43.3	21.1	4.9	点紋緑泥石片岩	図6g
⑬	あきる野市	前原	47	30.5	5.3	緑泥石片岩	図3h
⑭	西東京市	下野谷	46.5	30.4	6.3	点紋緑泥石片岩	図6c
⑮	世田谷区	殿竹	39.4	23.6	4.8	緑泥石片岩	図6d



資料3. 埼玉県～東京都の縄文遺跡から産出した結晶片岩製石皿の大きさ

①上野 (1997) ②長滝・中沢 (2006) ③保田・吉田 (1997) ④植木・植木 (1988) ⑤上野・細田 (2012) ⑥報告書無し ⑦徳留ほか (2013) ⑧柳戸・村上 (1999) ⑨富本 (2019) ⑩富本ほか (2001) ⑪中島ほか (2000) ⑫宮沢 (1993) ⑬渋谷・黒尾 (2010) ⑭工藤ほか (2003) ⑮岩橋 (2010) 数値: cm ():実測値



資料 4. 埼玉県から神奈川県までの縄文時代の打製石斧の石材利用傾向

①デーノタメ遺跡 (磯野ほか, 2019) ②南中丸下高井遺跡 (立木ほか, 1998) ③吹上原遺跡 (鈴木ほか, 2015) ④海谷遺跡 (中島・新藤, 2003など) ⑤下宅部遺跡 (戸沢ほか, 2006) ⑥羽ケ田上遺跡 (新堀ほか, 2018) ⑦日影山遺跡 (板野, 1999) ⑧多摩ニュータウン遺跡 (佐藤・山口, 1999など) ⑨下野谷遺跡 (市毛ほか, 1998など) ⑩中原遺跡 (阿部・飯塚, 2005) ():調査個数

謝 辞

小川町教育委員会の高橋好信氏には、石器の観察と各市町村の埋蔵文化財調査報告書の閲覧をさせていただいた。また、関東山地研究グループの方々には助言をいただいた。記して感謝する。

引用文献

阿部友寿, 飯塚美保 (2005) 中原遺跡. 神奈川県埋蔵文化財調査報告48. 財団法人 かながわ考古学財団.
 大工原 豊 (2008) 縄文石器研究序論. 六一書房.
 土井永好 (1986) 橋本遺跡 縄文時代編 本文. 相模原市橋本遺跡調査会.
 古谷芳貴 (2017a) 東原遺跡 一第1次調査一 遺物編. 所沢市埋蔵文化財調査報告書 第70集.
 古谷芳貴 (2017b) 山下後遺跡一第6・8・9・10次調査一. 所沢市埋蔵文化財調査報

告書 第71集.

林 徹, 大賀秀実, 新海達也, 松木綾子, 野尻夏姫, 依田亮一 (2017) 恋ヶ窪東遺跡発掘調査報告書 第22次調査.
 市毛 勲, 多宇邦雄, 片山正紀, 工藤敏久, 古城 泰, 米倉 薫, 渡辺丈彦, 柳谷博 (2000) 下野谷遺跡Ⅱ—縄文時代中期(2)—一. 早稲田大学校地埋蔵文化財整理室.
 石塚和則, 安井智幸 (2017) 稲荷上遺跡 第6次調査. 狭山市遺跡調査会報告第26集.
 神奈川県立埋蔵文化財センター (1983) 早川天神森遺跡. 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告2.
 栗島義明 (2012) 緑泥片岩製石棒に見る需給システム—縄文時代後晩期の石棒製品の生産と広域流通—. 埼玉県立史跡の博物館 紀要 6 : 1-24.
 黒坂禎一 (2008) 牛原/御新田/番匠・下道/横沼新田/北谷. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告. p. 353. 公益財団法人埼玉県

- 埋蔵文化財調査事業団。
牧本 博，竹内圭史（1992）寄居地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）。
- 松岡喜久次（2025a）埼玉県の縄文時代の石器の石材と採取石地—打製石斧，石皿，磨石および凹石—。埼玉県立川の博物館 紀要 25：21-32。
- 松岡喜久次（2025b）埼玉県から神奈川県から産する縄文時代の石器の石材—緑泥石片岩製石皿の分布と採石地—。地学団体研究会第79回高田総会，ポスターセッション。
- 三村竜一，百瀬長秀，原田健司（2019）長野県松本市エリ穴遺跡発掘調査報告書．松本市文化財調査報告 No. 228。
- 西井幸雄，鈴木孝之（2008）大木戸遺跡 1．埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第355集。
- 尾形則敏，徳留彰紀，松木綾子，中村真理，新海達也，藤波啓容（2024）埼玉県志木市埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 西原大塚遺跡第35地点．志木の文化財 第97集。
- 佐藤宏之，山口慶一（1999）多摩ニュータウン遺跡 No107遺跡 旧石器・縄文時代編．東京都埋蔵文化財センター調査報告 第64集。
- 下野原遺跡調査団（2007）東京都西多摩郡奥多摩町 海沢・下野原遺跡 奥多摩町海沢チャート原産地における縄文時代集落の発掘調査。
- 新堀 哲，郡山雅友，松井 泉，中野拓大（2018）東京都羽村市羽ヶ田上遺跡 第7次 第8次 埋蔵文化財報告書。
- 新藤 健（2007）西上遺跡 第1次調査・遺物編．所沢市埋蔵文化財調査報告書 第41集。
- 新藤康夫，大坪宣雄，相川 薫，杉本靖子，長谷川 静，渡辺昭一（2009）東京都八王子市小田野遺跡．第4次・第5次発掘調査報告書。
- 鈴木一郎，中岡貴裕，麻生順司，坪田弘子，齋藤武士，御代七重，西本正憲，太田雅晃（2015）吹上原遺跡（第2次A区～第6次調査）．和光市埋蔵文化財調査報告書 第59集。
- 鈴木美香，江藤哲人（2010）相模川下流域の河原礫の形態分析と礫種組成．横浜国立大学教育人間科学部紀要 4 自然科学 12：17-35。
- 谷口康浩（2024）第4章 第1節 概説 縄文時代．清瀬市史 7 資料編 考古：73-83。
- 徳留彰紀，尾形則敏，藤波啓容，松木綾子（2013）西原大塚遺跡第174①地点．志木市の文化財 55。
- 富本久美子，村上達哉，熊澤孝之（2001）落合上ノ台遺跡 第1次調査．飯能市内遺跡発掘調査報告書。
- 戸沢充即，千葉敏朗，石川正行，小川直裕，秋元雅彦（2006）下宅部遺跡Ⅰ．東京都市整備局西部住宅建設事務所，東村山市遺跡調査会 下宅部遺跡調査団。
- 上野真由美（1997）広木上宿遺跡．埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第185集。
- 早稲田大学地理埋蔵文化財整理室（2000）下野谷遺跡Ⅱ 縄文時代（2）。
- 山本 薫（1989）縄文時代の石器に使われた岩石および鉱物について—石器製作における石材の選択とその背景—。地学雑 98：79-101。
- *本報告において、図表類中の各市町村の埋蔵文化財調査報告書については省略した。